

子どもの貧困対策における図書館の役割

嶺井 尚子

日本では、貧困が社会的な課題として掲げられており、貧困対策として、2015年から生活困窮者自立支援事業が実施されている。この事業の課題のひとつとして、生活困窮者が自ら学習するよう促す支援の必要性が挙げられている。図書館は、これまでに貧困・困窮者支援を実施してきており、自立を目的とした学習の支援に適した社会教育施設であると考えられる。従って、本研究では、貧困対策を実施する部署と図書館の両面から貧困対策における図書館の役割について調査することによって、貧困対策における図書館の役割を明らかにし、生活困窮者自立支援を再考することを目的とする。また、貧困の中でも特に重点的課題とされる子どもの貧困に着目する。

本研究では、現在の貧困対策を実施するに至る経緯、貧困・困窮者支援を実施する図書館の事例を明らかにすることを目的として、政府による報告書や刊行物、雑誌論文を対象とし、文献調査を実施した。その結果、①バブル崩壊やリーマンショックをきっかけに、貧困や格差が社会問題として注目されたこと②貧困が、福祉の領域のみではなく多面的な課題であると捉えられるようになったこと③貧困・困窮者支援は課題解決型サービスのみでなく、多様な形の支援があることが明らかになった。

また、子どもの貧困対策を重点的課題として取り組む地域を調査対象とし、文献調査の補足として、半構造化インタビューを実施した。対象者は、子どもの貧困対策に携わる部署の職員、公立図書館の職員、学校図書館の職員とした。その結果、子どもの貧困対策に携わる部署の職員は、各部署が子どもの貧困対策を意識した業務を実施するよう促すことを目的としていた。また、図書館に対し、子どもの居場所や読書による心の育成に期待を寄せていた。図書館の職員は、読書推進を目的として業務を実施しており、子どもの貧困対策については、行政の決定によるものと認識していることが明らかになった。学校図書館職員は、読書推進や授業に用いる資料収集といった学校における情報センターになることを目的として業務を実施しており、子どもの貧困対策については、図書館が情報を発信する施設であることが間接的な子どもの貧困対策につながる可能性があるのではないかと述べた。

これらの調査結果から、子どもの貧困対策における図書館の役割として、①読書推進による心の育成、②居場所の候補、③情報を発信する施設、④相談先や質問に対する選択肢の一つの4点が挙げられた。この役割を基にした、生活困窮者自立支援として図書館との連携による学習や空間の提供が挙げられる。これは、子どもの自立のみでなく、親の子どもに対する教育や居場所に関する課題解決の一助となることが挙げられるのではないかと考えられる。

(指導教員 呑海沙織)